第68号
平成12年6月14日発行

山岳ぐんま

群馬県山岳連盟
〒371-8570　前橋市大手町1-1-1
群馬県庁観光物産課内
TEL 027-223-1111 内線3151

編集発行人
群馬岳連編集部　羽野順一
印刷所　朝日印刷工業(株)

平成十二年度　群馬岳連総会報告

群馬県山岳連盟会長　星野　光

群馬県山岳連盟平成十二年度総会は、五月二十日(土)午後五時から上毛会館において、五月定例理事会に引き続いて開催された。

本年は役員改選期に当たっており、先に理事会において協議・推薦された役員が八木原圀明理事長から発表され、拍手多数によって承認された。前年度に引続き星野光会長が留任、副会長にはこれも留任の田中成幸・富山真両氏に加えて、勇退した悴田正也氏にかわり大沢清氏が就任した。また、幹事は堀口貞夫氏が留任、新たに竹山繁男氏が就任した。更に、海外登山部長には後藤文明氏が、事業部長には長谷川勇氏が新たに任に就くことになった。

星野会長が挨拶に立ち、「今年本県で開催される全国登山体育大会が、厳しい社会情勢の中でも群馬はよくやったと言えるように、岳連一丸となっての協力と支援を呼びかけ、また、登山活動については、地道に訓練に励み、時期が到来した時には群馬ここにありというところを見せてほしい」と激励した。

議案審議は、岳連規約に従って議長を会長が担当して進められた。始めに、平成十一年度事業報告を、女屋事務局長が、議案書に従って総務部・編集部・遭難対策部・登山指導部・海外登山部・国体部・自然保護部・事業部・クライミング部の各部にわたって説明を行い、拍手多数で承認された。

続いて、平成十一年度会計収支決算報告並びに平成十一年度基金調書報告が、会計担当の富山副会長によって説明され、これについて堀口幹事から、適正に処理されていたとの監査報告がなされ、決算書・基金調書通りに承認された。

次に、平成十二年度事業計画について、女屋事務局長から提案され、引続き提案された平成十二年度予算並びに平成十二年度補助金等の内訳案とともに一括審議された。

上程された議案は、議案通りに承認が行われて、総会の議事を終了し閉会した。

《平成十二年度主要事業計画》

一、遭難防止活動の推進

谷川岳を中心とした地域の遭難防止のためのパトロールの実施、救助活動および救助隊の技術の向上のため訓練を行う。

二、国体への参加と選手強化

第五十五回国体山岳競技関東地区大会（山梨県）への参加と、２０００年とやま国体（富山県）山岳競技会における好成績達成を目標とする選手強化を推進する。

三、日山協主催行事等への参加と各会の交流

日山協行事等に参加するとともに、各会との交流を深め、研修会等を通じて技術の向上、岳人としてのモラルの高揚を図る。

四、美化活動等市民運動への参加

尾瀬のゴミ持ち帰り運動及び谷川岳等の美化活動等の推進に協力する。

五、岳連会報の発行

『山岳ぐんま』の発行を通じ、会員相互の結びつきと啓蒙を図る。

六、海外登山

第九次群馬岳連ヒマラヤ登山を計画する。

七、第十一回山田昇記念杯登山競争大会の開催

群馬が生んだ登山家、山田昇氏の業績を後世まで伝えるため、登山の基本である体力を競い合い、登山の啓蒙・普及・発展の一助とする登山競争大会を開催する。

▽開催期日　九月三十日～十月一日（土～日）

▽会場　武尊山（利根郡川場村）

八、第三十九回全日本登山体育大会の開催

▽開催期日　九月十五日～十七日（金～日）

▽会場　谷川岳周辺（利根郡水上町・新治村）

九、各種研修会及び講習会の開催

指導員会及び遭難救助隊が主管して一般会員を対象に登山技術講習会を開催し、併せて指導員の資質の向上を目的として研修会を開催する。

十、岳連事業収入の確保

岳連の事業・事務を円滑に推進するため、平成十三年版山岳写真カレンダーの作製・販売などの事業を行い、自主財源を確保する。

十一、第五十六回国体関東ブロック大会山岳競技の開催準備

平成十三年度、本県で開催される国体関東ブロック大会山岳競技のコース調査等を実施し、準備を進める。

十二、スキー・山岳博物館資料調査の推進

利根郡水上町に建設が計画されている「スキー・山岳博物館」に展示する山岳資料の調査を推進する。

群馬県冬期マナスル登山隊二〇〇〇

登山隊長　名塚　秀二

若くて強いヒマラヤニストを育てる。言葉では簡単に言えることだが、個々の家庭・職場に長期不在を強いる等ヒマラヤ登山の環境を考えると、それは明らかに容易なことではない。かと言って、その環境が整う時期を待っていたのでは、到底登れなくなってしまう。

九七年のカラコルム登山から二年、あまり期間を空けずに当時参加した隊員を中心に、そして、さらに次世代を作って行く若い人達を育てる登山をやろう。登山を行うのであれば、厳冬期にこだわっていたい。こんな発想から今回の登山はスタートした。

九八年の十一月頃に主だった隊員が集まり、一月からの登山を行うのであればマナスルと決め、これを登るにはスピードがキーポイントとなるので、サガルマータ南西壁の成功にならい、プレ登山を行う事と決めた。

そのプレ登山にはダウラギリ、又はサガルマータのプレ登山で行ったチョー・オユーという話も出たが、今まで岳連隊で行っていないシシャパンマに決めた。

マナスルを一月から登山開始となると、プレ登山のシシャパンマも、ポストモンスーンのベスト時期の十月上・中旬よりもさらに一ケ月程遅い時期にスライドしなければ、プレ登山を行う意味合いが失われてしまう。しかし、十一月の下旬にもなってくれば風の吹き出しが強くなり、高所での行動が出来なくなってしまう。そこで十月下旬から十一月上旬に頂上へということに決める。

九月十八日、先発の星野龍史・剱持典之・福本誠志・田島崇行が出発。九月二十四日に本隊の私と後藤文明・内山栄・久保田昌幸が、カトマンズに向かった。

本隊到着後一週間で準備を整え、十月二日にカトマンズを出発、中国のザンムーに入った。私達としては、時間もまだ早かったので、ザンムーより高度の高いニエラムまで行きたかったのだが、連絡官が動きたくなかったのか、ザンムー泊まりとなってしまった。

翌日早くザンムーを出発し、二時間程でニエラムに到着し、早速近くの丘に向かい、高度順応トレーニングを行う。久し振りの高度で思うように体が動かない。全員が完全ではないが、四日にTBC（五、一〇〇m）のチャイニーズベースキャンプに入る。この高度まで一気に車で上った事もあって、トラックからの隊荷降ろしも一苦労である。TBCから見るシシャパンマの頂上には雪煙が見える。ここTBCもかなりの風が吹いている。今年のモンスーン明けは遅いのか、上空には雲がびっしりとまとわり付いている。翌日は休養日として、六日から、TBCの北にある丘で高度順応トレーニングを開始。各隊員がそれぞれの体調を考え、BC移動までの五日間の間に三日間行動する事にした。既にBCへの移動日までに、高度の影響もあってか、体調を崩す隊員も出てきていた。

十日にTBCよりBCへ移動。田島は当日体温が三十九度近くもあり、一緒にBCに向かうのは無理と判断。後で一人BCに入ってもらう事にして、七人でTBCを出発した。この日も風は強く、大平原の中、風をさえぎる何物もなく、ひたすらBCに向かって歩くのみ。現地のヤク飼い達はBCまで六～七時間と言っているが、私達の足ではとても無理であろう。まして向かい風である。たまに風を遮りそうな大岩などを見つけて休むのだが、あまり役に立たない。途中、今まで頑張っていた外国隊と行き逢い、全ての登山隊がBCを引き上げたとのこと。今年のポストモンスーンのシシャパンマは、約十隊が入山したが、三～四隊が中央峰（八、〇〇八m）に、モンスーン明け前の九月中旬頃に登ったとのこと。他の登山隊はその後も登山活動を続けていたが、天候の不安定、さらに強風に悩まされて登頂を断念したとのこと。私達も今受けている風から、頂上に近くなればなるほどさらに強い風が吹いている事が想像出来る。

約八時間かけてBC（五、七〇〇m）に到着。BCはエボガンジェロ氷河右岸のサイドモレーンの窪地に建設し、その後三日間を準備にあてた。十一日に田島がBCに上がってきたので驚く。TBCでたった一日の休養だけで体が元に戻るはずもなく、本人は大丈夫と言っているが、恐らく一人TBCに居るのがいやになってしまい上がって来てしまったのだろう。相変わらず風は強い。十二日夜九時頃、キッチンテントが強風で飛ばされ、夜も遅いという事もあり、他のキッチン用具等がこれ以上飛ばされないよう固定し、十三日朝より私達のメステントも屋根にロープをかけて補強して、キッチンテントをメステントの風下に建て直した。

十四日に登山を開始。今回はシェルパレスで全ての荷物を私達隊員で荷上げしなければならない。それでも一人七～八kgと軽い。田島は復調していないのでBCに残し、八時頃BCを出発。エボガンジェロ氷河右岸を進み約四時間程で氷河のどんづまりに着き、左のアイスピナクル帯を渡って、雪面に入って行く。この頃から強い者弱い者の差が出始めた。十二時二十分頃、斜面右側の上部セラックが崩壊し、私達に雪崩が迫って来たが、規模が小さく、左に四〇～五〇m逃げて末端の雪煙を浴びただけで事なきを得た。斜面の中に四ヶ所程クレバスが口を開いており、ロープを固定して進む。午後三時を廻り未だC1予定地に到達出来ず、荷物をデポしてBCに引き返す。しかし、BCへの道も長く、早い者でも四時間程を費やした。高度順応が出来ていない事もあるが、この先が思いやられる。十五日もやはり前日と同じ位の時間をかけてC1予定地に到着。田島・久保田は休養、内山はC1へ到達出来ずに途中デポしてBCに引き返した。十六日は星野・剱持が休養。六人でC1に向かうが、C1付近はホワイトアウトで、最終フィックス地点にデポしBCに戻った。田島は体が完全に戻っていない様で、アイスピナクルを渡った所で引き返してしまった。十

七日は、星野・剱持でC1（六、四〇〇m）を建設。十八日に、後藤・久保田・福本がC1に移動。この日は朝から天候が崩れ始め、北西風が強く、C1付近はホワイトアウト。先に上がった星野と剱持も上部に上がれず動けずにいた。この頃になるとようやく体が順応してきたのか、BC～C1間を九～十時間で往復出来る様になってきていたが、内山・田島がどうしてもC1に到達する事が出来ないでいた。BCでも雪が降り始め、二十日まで、C1も同様に雪に閉じ込められ行動出来ずにいた。

マナスル

二十一日、三日ぶりの快晴。BCでは約七十cmの積雪があり、当然トレースも消えてしまった為、三人でトレース作りを行うことにし十時から十四時半までを費やしたが、雪が降る前の一時間分くらいしか進めなかった。二十二日は、前日のトレースが進まなかったので、C1の星野と剱持にC2へのルート工作に出てもらい、後藤はC1で待機。内山・田島の今までの行動実績を見るとC1には到底到達できないと思い、久保田と福本に、C1下部のトレース付けと、二人の荷物をアイスピナクル上で受け取り荷上げをしてもらう事にし、名塚はC1へ移動することにした。しかし、BCからの行動は遅々として進まず、時間ばかりが経っていく。久保田・福本は、二人とコンタクト出来るおおよその時間をトランシーバーで打ち合わせて行動を起こしたが、こちらもC1から下の斜面の雪が安定していないせいもあってか慎重に下降しているため進んでいない。名塚は三時過ぎにアイスピナクルのトラバース地点に到着したが、そこにデポしてあった登攀用具が雪に埋もれており、C1への移動をとりやめ、ここにビバークする事とし、掘り出しにかかる。その頃、上と下の二つのパーティーは、それぞれの判断で行動をとりだしてしまう。

久保田と福本は、アイスピナクル帯に到着したが、下を見ると内山と田島が遙か下で、ここで待って荷物を受け取りC1に帰幕しようとすれば暗くなってしまうと判断しC1へ向けて登り出してしまう。一方、内山と田島は到底受け渡し地点まで到達できない。又は、上の二人がC1に戻って行く姿が見えたのか、田島は遙か下で荷物をデポしてBCに引き返してしまう。内山も途中でデポしてしまうが、今までトレッキングシューズで行動していて、プラブーツが登攀具類と一緒にデポしてあるので、名塚のいる地点まで向かって来た。当然、下の二人はここまで来るし、上の二人も下の二人が遅れていればここまで来ると思っていた。

下の二人が遅いので、下に確認に出掛け、途中内山と合流した。田島はすでにBCに向かっているとのこと、上を見れば二つの点がC1へ向けて移動しているのが見える。トランシーバーを取り出し、福本にすぐ荷物を引き取るように伝え、内山と田島が途中デポした荷物を目的地まで運び、内山はBCに引き返してもらう。名塚が掘り出しをしていると、福本が疲れた顔をして到着。久保田は大分遅れているとのこと。福本に荷物を渡してC1に向かってもらう。久保田もそのうちに到着したが、久保田のスピードではC1に帰り着くことはできないと本人の申し出があり、二人でビバークすることにした。名塚はC1移動であったのでシュラフを持っていたが、久保田は着のみ着のままである。雪洞を掘ろうとしたが浅くてできない。半雪洞半イーグルは雪が柔らかくこれもできない。しかし幸いにも、今日荷上げし一つ取り残された荷物がC3建設資材であったため、コンロ・EPI・ツエルトがあり、久保田には、名塚がアタック用に持ってきた羽毛服・羽毛ズボンを出してビバークすることにした。しかし、高度は六、〇〇〇m、シュラフに入っていても寒い。久保田はと見ると、イビキをかいて眠りに入っている。寒さには強いのだろうか。

C2へルート工作に向かった星野と剱持が夕方C1へ帰着したが、暗くなっても福本がC1に帰って来ないので、疲れている体にムチ打って星野に迎えに出てもらい、福本をC1に引き上げてもらった。

二十三日は風が強く上部はブリザード、ルート工作ができない。十二時頃まで掘り出しをしたが、全部を回収できず、後は下の二人にまかせることにして、C1に移動を開始する。しかし、風で昨日付けたトレースは全て消えており、C1の後藤にトレース付けで下に向かってもらい、合流後、遅れている久保田の荷物を持ってもらいC1に入った。

二十五日にC2（六、九五〇m）を建設。

二十六日はC3へのルート工作。十月上旬まで数多くの登山隊が入っていたにもかかわらず、十八～二十日に降った雪でトレースは消えており、C2を一歩出た途端、膝くらいまでのラッセルが始まる。結局C3予定地の北東稜に出るまで、途中所々クラストした所はあったがラッセルに苦しめられてしまう。途中二本の固定ロープを張る。この固定ロープは、アタック用に用意したもので後で回収した。

二十八日にC3（七、四五〇m）を建設。六名でC2を出発したが、北東稜の取付の斜面に入ると、久保田が遅れだす。久保田を待って本人の調子を聞くが、別に悪くないという。ちなみにパルスオキシメーターの数値を聞くと、昨日の休養日は四〇台後半で、今日の朝は五一とのこと。これではとても

シシャパンマ

二十九日、C3を八時半に出発。星野を先頭に、所々大きなラッセルもあったが、大ピナクルに近づいていく。本峰へ向かうトラバース地点に到着し、トラバースルートの上部の雪庇を見るとあまり発達しておらず、斜面の雪も十日前降った雪は、落ちる雪は落ちてしまい安定しているように見える。躊躇することなく左上を開始する。しかし、ここでも、もぐる所は膝下くらいまでのラッセルがあり、3本のロープを張っては回収の繰り返しで、十ピッチで主峰と中央峰の間の緩傾斜帯に出たが、すでに十六時三〇分になっていた。頂上はすぐそこに見えているのだが、今までのラッセルを考えると、そう近くはないと考え、全員空身で行動をすることにした。しかし、その後は意外と雪質は硬く、十六時五〇分から十七時〇五分にわたって、星野・名塚・後藤・剱持・福本の順で登頂。

三十日、C3から一気にBCへと思い下山を開始したが、個人装備、共同装備と下へ向かう程荷が重くなってきて、シェルパレスのつらさを痛感する。BC帰幕は三十一日夜中の二時を廻っていた。

十一月二日、前日BCにつくはずのヤクが上がって来ていない。星野とキチンボーイを確認のためTBCに向かわせたが、BC～TBC間も雪に悩まされていたようで、十五時過ぎにヤクがBCに到着した。

四日にカトマンズに戻り、マナスルの準備を行い、十一日に帰国した。

隊員の入れ換えを行い、十二月十一日に日本を出発。先に高度順応でネパールに入っていた品川とカトマンズで合流し、十五日に隊荷とコック、キチンボーイ二人で、先にヘリコプターでサマの先、マナスルBCの登山口であるケルモカルカに入り、翌十六日に隊員がケルモカルカに入った。

十七日、全員でBCに向かう。佐藤と田島は無理をせず途中まで。既に登山活動を行っている札幌山岳連盟隊は約四、七〇〇mまで達していたが、高度順応がうまくいっていない隊員もおり、それより上部がなかなか伸びないようである。BCからは本峰は見えていないが、かなりの雪煙が吹いているのが見える。二十日まで各々の隊員が二回BCを往復した。

二十一日にBC（四、七〇〇m）を建設。札幌隊は二十日に登山を断念し、二十二日にBCを撤収していった。

二十四日、佐藤・品川・田島でC1へ荷上げを開始。本峰手前の大ピナクル付近より作りだされた雲により、BCは終日、陽に当たることがなく、BCより見えるガネッシュ山群にも雲がかかっていた。二十七日まで全員がC1までの荷上げを行う。二十八日は、前日C1に入った佐藤パーティーが札幌隊のC2まで上がったが、私達の予定している高度よりも大分低いので、さらに上部の良い場所をと見てもらうが、アイスフォール帯が終り、斜面の中に入ってしまうので良い場所がないという。佐藤パーティーは当初の目的のC2への偵察、高度順応を終えてBCに帰幕。この日、私達の他に登山活動を行っていた外国隊の二人が、一月一日の登頂を目指してBCを出発して行った。

三十日より無風快晴。この穏やかな天候が続いてほしい。

二〇〇〇年一月一日、名塚・後藤・剱持・福本でC1（五、六〇〇m）建設。外国隊の二人は登山を断念してBCに下山していった。

三日、前日C1へ移動した佐藤パーティーがC2（六、二五〇m）建設。途中のアイスフォール帯は八九年のルートと比べると、崩壊した箇所が数多くあり、ルートも大分右寄りのルートをとっている。C2地点は、札幌隊のC2より若干上に上げた。四日はC2よりC3地点を決めるべく、七、一〇〇mまで上がり、ルートより右へ一ピッチ、テントサイトになりそうな場所を見つけ、品川はさらに上部へ高度で一〇〇mほど登ってみるが、良い場所がないという。佐藤が見つけたテントサイト付近に、今日二人が荷上げした荷物をデポしてもらいC1に降りてもらう。これでアタック体勢が整った。上空の天候は、十二月三十日より五日間続いた晴天が、大ピナクルに雲をまとわり付ける。

五日、名塚パーティーがC2へ移動。六日は、翌日アタックの予定でC3への移動。C2より北峰のコルへは二時間程で到着し、コルより上は雪がしまっており気持ち良く高度を稼いで行ける。C3地点に近づくにつれて、昨日より大ピナクルにまとわり付き出した雲が黒くたれこむように私達に近づきつつあり、上部のフィックスロープが始まる六、九〇〇mで、もし今日C3を建設しても明日アタック出来なかったら、折角荷上げした食糧を食い潰すだけと考え、又、登山も始まったばかりで気持ア
タックどころか、C3でつぶれてしまうと判断し、一人C2へ下ってもらおうとしたが、歩き方がぎこちない。名塚が同伴して下山を行う。斜面からC2プラトーに達する頃には足取りもしっかりしてきており、顔もいくらかしまった顔に戻ってきたので、一人C2に帰ってもらい、名塚は再度アタックのためC3へ向かった。

C3は風の通り道なのか、とにかく風が強い。風下側の出入口は見る間に雪が吹き溜まり、何度か外に出て雪を取り除く作業を行わねばならなかった。

ちの中にゆとりもあり、無理をすることはないと思い、C2へ引き返した。

七日に、C1の品川とC2の福本の隊員の入れ換えを行う。さらにこの頃になると、C1～C2間のアイスフォール帯のクレバスが大きく開いて来ているので、佐藤・田島にルート補修を行ってもらう。

八日、C2より再度C3建設。アタックへと出発。四日以降大ピナクルにまとわりついている雲は南東へ流れているが、C2付近は風もなく、今日はC3を建設出来ると思われた。しかし、北峰のコルに出た途端、強風に見舞われる。それでもこの風は北峰のコルだけであろうと何度も片膝をついて耐風姿勢をとりながら進むが、全く風は弱くなるふうもなく、六日と同じ地点でC2へ引き返した。このままC1とC2に滞在していると食糧が無くなってしまい、今後の登山に支障をきたす。また、二度アタック体勢に入って失敗しており、全員でBCへ一時撤退することに決めた。BCでは少しではあるが、雪が降り始めていた。

翌九日から十五日まで、時々はやむが雪が降り続き、雪かきを何度か強いられた。

雪は十五日の夕方頃やみ、翌十六日は、佐藤・福本・田島でC1へのトレース付け、品川・剱持でサマから上がってくるポーターのためにBCから下のトレース付け、名塚・後藤でコックとキチンボーイと一緒に水の確保に出掛けた。

十七日は久し振りの雲一つ無い快晴。名塚パーティーがC1へ移動。テントは雪に埋もれており、約一時間かけて掘り起こす。

十八日、C2への移動。C1より出て直ぐのラッセル。名塚がヒドンクレバスに左足を突っ込むが、小さなクレバスで事なきを得る。フィックスロープは全てが雪に埋もれており、掘り起こしが出来ない。この状態ではとてもC2に移動することは出来ず、途中ザックを置き、ルート工作を行うことにする。とは言ってもロープはさらに上部にデポしてあるので、行けるところは強引に通過をしたが、約五、九〇〇mでC1へ引き返した。

十九日、BCより佐藤パーティーがロープとスノーバーを荷上げして来た。昨日の朝方からピナクルに掛かっていた雲が厚みを増している。C1は午後二時頃から雪が降り始め、共に風も強くなってきた。快晴は二日ともたなかった。午前中はまだ楽観していたが、このようなサイクルで天候が悪くなるようであれば、とても頂上に達することは出来ず、C2直下のアイスフォール帯の崩壊、クレバスの開きの拡大等を考えると、登山の快適さを失い、危険だけが伴うことになってしまい、隊員に「突っ込め」とは言えず、午後六時の交信で、「登山断念」を伝えた。

マナスルは失敗してしまったが、決して厳冬期だからといって悪天強風ばかりの日ではないように思う。勿論、アンナプルナ、サガルマータと失敗した時は二月まで粘り、一月の天候の悪さ・強風は身をもって体験しているが、成功した時はいずれも十二月中にBCを撤収しており、あの時のシーズンであったなら、一月も風の弱い日・快晴もあったのではないかと思われる。今回のマナスルの十二月三十日から一月三日までの無風快晴のように。

シシャパンマでは、若い隊員が準備から良く動いた。九七年のカラコルム登山、境町山の会のダウラギリ登山で、各々担当の動きを理解していた。但し、荷上げ等で何故その荷物を上部に上げるのかを理解していれば、決して疎かに出来ないと思うようになるし、たとえ一人二人が潰れたとしても、それを補うことが出来るのが組織登山である。今回の登山だけで、若手を育成することが出来た出来なかったと言えないが、是非とも今後の岳連隊のヒマラヤ登山に参加して、シシャパンマ・マナスルの経験を生かしてもらいたい。

全日本登山体育大会の開催にあたり

群馬県山岳連盟理事長　八木原圀明

第三十九回の全日大会が第4回の尾瀬大会に続き、群馬県で開催されることになりました。

前回は「関東地区」の山岳連盟が主管ということで、全面的に群馬岳連が担当ということではありませんでしたが、今回は群馬岳連が単独で主管ということになります。会員の皆さんのご協力をお願い申し上げます。

本年五月二十八日に「日本山岳協会創立四十周年」の記念式典と祝賀会が盛大に東京で開催され、群馬岳連からも星野会長以下大勢が出席しました。

この社団法人・日本山岳協会がそれまで登山界を二分（？）していた全日本山岳連盟と日本山岳会が合流する形で結成されたのが一九六〇年（昭和三十五年）四月でしたが、その新日本山岳協会発足後初の大きな行事である全日大会が第四回の尾瀬大会でありました。

その「日本山岳協会創立四十周年記念兼西暦二〇〇〇年記念」のまさに記念すべき、ミレニアム大会が私共の故郷の山と言うべき谷川岳を中心とした山々で開催されることになったのも何かの因縁でありましょう。

一九六〇年という年は谷川岳にとっても大きな出来事のあった年でありました。谷川岳ロープウェイ（全長二、二〇〇m）が完成し、九月十九日朝、衝立岩で宙づりとなった二人のクライマーの遺体が発見され、自衛隊の銃撃によるザイル切断という方法が採用されて、発見から六日目に群馬の相馬ケ原駐屯部隊が約二時間かけてザイルを切断しました。この事件で谷川岳の名は一躍知られることとなったのです。

今回は前回の尾瀬同様、山岳県群馬を代表する名山であり、日本中にその名を知られている谷川連峰を中心に、その谷川連峰の雄姿を望むには打ってつけのビュー・ポイントである吾妻耶山や大峰山を舞台に大会が繰り広げられます。

登る山、見る場所については完璧です。あとは私共がいかに準備を万端にし、日本中から参加される山仲間の皆さんに最高のホスピタリティを発揮し、気持ち良く、また満足していただくか、です。

私共群馬県山岳連盟の力の見せどころです。

しかし、私共岳連会員がいくら踏張っても足りないモノもあります。登ること、登らせたり案内することは地元の私共でできますが、宿泊や歓迎会となると私共だけでは不可能です。

登山体育大会ですから楽しんで登っていただくことは当然ですが、参加者の大半の方々は登山経験の豊富な、いわゆる中高年登山者と言われる皆さんです。それが日本中から集まって来られるとなれば、尚更です。

ご安心ください。谷川岳の麓にはこれまた日本を代表する名湯・水上温泉郷や猿ケ京温泉が控えております。山でかいた気持ちの良い汗を流すには最高の条件を備えております。名山を登り、眺める楽しみはもちろんですが、「アフター登山」も十二分に楽しんで頂けることは請け合いです。

幸い、水上町、新治村当局の協力も確約を頂いておりますし、群馬岳連とこの両町村が一体となっての準備、実行となれば文句なしの力が発揮されることは間違いありません。

これまでに私共の先輩の皆さんはいくたびかの大きな大会を主催、主管をして来ておられますし、あかぎ国体（一九八三年）も立派にやり遂げております。この国体運営の経験者もたくさん岳連には残っております。皆一様に十七歳の年をとったことにはなりますが。

日本山岳協会の元会長の故鎌田久氏は、日山協の幅広い活動の中における全日本登山体育大会を『骨の国体、血の全日大会』と位置づけておられたそうであります。日本体育協会加盟団体としての日山協は競技登山の代表としての国体（国民体育大会のことです）はありますが、選手ではない日本中の加盟山岳会員の直接参加の場としての全日大会を協会活動の最も大きな柱の一つとしてとらえておられた訳であります。

私共もこの全日大会の意義をあらためて考え直し、認識し準備を進めて参りたいと思います。

この三十九回大会は関東地区の岳連が担当することにはずっと前から決まっていたのだそうです。ところが四年前、三年前となっても引き受ける岳連が出てきません。これまでに一度も全日大会を開催していない関東地区の都県は、東京・茨城・千葉の三都県でした。これらから手が挙がれば何の問題もありませんでした。

しかし、いつになっても「うちはダメだ。もう時間がない、山がない」等々の逃げ口上で話がつきません。しかし大会を中止することはできません。

昨一九九九年二月に関東地区岳連の連絡協議会が栃木県の那須で開催されました。その席で私は水上町を中心に進められている谷川岳の麓に建設構想のある「山岳博物館」の資料集めの協力を連絡協議会員である各都県岳連に要請いたしました。

谷川岳登山は特に東京や神奈川などのクライマー達によって開拓がすすめられて来たと言っても過言ではありません。

日本山岳会員による本当の初期の尾根や稜線の初踏破、その後の一ノ倉沢に代表される岩場の開拓は、先鋭的大学山岳部や社会人山岳会員のクライマーによって次々に果たされ、日本の登山水準を押し上げ、ヨーロッパアルプスやヒマラヤの登山にも通用する力をつけてきたのでした。

谷川岳を中心とする山岳博物館が建設されるとするならば、山岳団体である私共が協力できる分野は「登山」に関わる事柄です。そして初期の開拓に関わったそれらの多くの方々によって保存されているに違いないさまざまな資料は欠かせません。

関東地区の山岳連盟や加盟山岳会の協力なくしてそれらを発掘、発見することは不可能です。

地元の山である谷川岳でありながら、初期の初踏破、初登攀競争に参入することの出来なかった私共群馬の登山界としては逆立ちしてもかなわないことであります。

それ故に日山協の常務理事会（関東地区の岳連役員が大半である）で資料の収集の協力を要請し、あらためて関東地区岳連連絡協議会で要請したものでありました。

そこで取引的に出されたものが「群馬岳連の谷川岳に関する資料集めには関東地区岳連として協力しよう。だから三十九回の全日大会は群馬岳連が引き受けてくれ。資金的にも、出来るだけのことは各岳連が分担して協力しよう」という提案だった。

私は「即答できない。大きい話なので岳連理事会に図らなくてはとても返事はできない」と答え、翌朝食時の「群馬岳連さんが全日大会を引き受けて下さって、本当に感謝している。皆さんで群馬さんに拍手でお礼を」という声にも一切反応せず、このことに関しては何も言わずに群馬へ帰ったのでした。

いずれにいたしましても、その後の私共の理事会で正式に大会実行引き受けを決定し、日山協に対して返事をした訳ですから、何としてでも大会をやり遂げなくてはなりません。

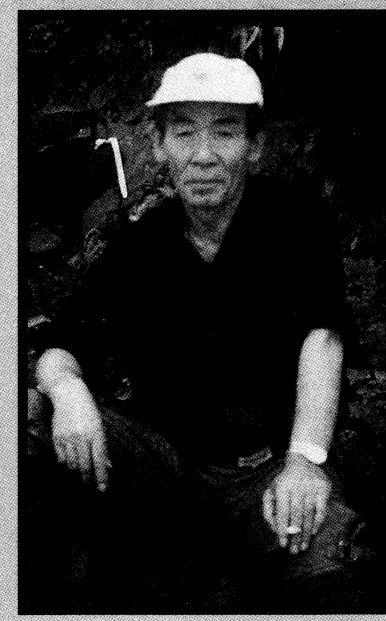
群馬の山や自然、温泉などを全国の登山者の皆さんに知っていただく良い機会でもあります。大きな負担を大きな喜びに変えたいと思います。

水上町、新治村の両町村と力を合わせ、紅葉には少し早いかも知れませんが、谷川岳を楽しんでいただきたいと思います。

「魔の山なんて誰が言う　味わい深し谷川岳」が本大会のテーマです。会員の皆さんの絶大なるご協力をお願い致します。

布施正昭先生を偲んで

前群馬岳連副会長　悴田　正也



こんなに早くお別れするなんてまったく予想だにしておりませんでした。人一倍健康で元気の良かった先生が、急な入院生活の中で快方に向かっていると聞き、安心していただけに大きな衝撃でした。

布施先生は長い間の高体連登山部の組織の中で、その創成期から中心メンバーとして加わり、安全登山の普及や高校生の登山活動の技術・体力の向上、さらに自然の持つ美しさと厳しさを植えつける場として、またそのまとめ役として大きな力を発揮されました。特に昭和四十二年から十一年の長きにわたって登山部委員長として、現在の高体連登山部のきちんとした組織づくり・人づくりを成しとげて勇退されました。

さらに特筆すべきことは、群馬岳連と高体連登山部の間に現在でも続いている「心地よい関係」をつくり上げてくれたことです。

昭和四十年代の初め、「昭和四十四年全国総体登山大会」が尾瀬で開かれることになり、当時は組織的にも技術的にも未熟であった登山部を、岳連の石井謙一郎・田中成幸さんをはじめ、多くの方々の指導や助言をいただき、特に登山技術では岩登りの基本技術、雪山での生活技術・歩行・救出方法、山スキー技術など、「審判員養成技術講習会」「山岳指導員検定」時や登山部内での各種講習会を通して、登山部顧問は岳連の方方から多くのことを学びました。これらの大きな橋渡し役を担ってくれたのが布施先生でした。四四総体は「はぐくもう美しい尾瀬に友情を」のスローガンのもと、全国からの選手を迎え、岳連関係者の絶大なサポートに支えられ、六十年ぶりの大雨で登山道があちこちで分断される状況の中で、コース変更と安全確保に全力をあげ、迂回コースを設け、参加生徒に大きな印象を残した大会になりました。この大会の協力関係がさらに兄貴分としての岳連との関係を深め、登山部内でも一層の技術の向上の必要性の声が高まり、県総体・集中登山・残雪期の尾瀬のリーダー講習会・顧問対象の夏山・秋山・冬山講習会などへ講師・役員を派遣していただき、また国体強化にかかわる諸事業などを通して、現在岳連と高体連登山部とのきちっとした良好な関係を作りだす礎を築いてくれました。

先生は常に他人との関係を重んじ、若い人たちの登用を考え、自らは一歩さがって事にあたってくれました。

少々さびしがり屋で、皆で居ることを好んでいた先生は、何よりも人の和を重んじ、登山活動やその普及に必要な人づくりや組織づくりに非凡な能力を持ち合わせていました。キャンプファイヤーの火を囲んで、また雪に埋もれた富士見小屋のストーブのまわりで酒をくみかわし、大いに語り、大いに歌いました。本格的な「安曇節」からカラオケ仕込みの「函館の人」まで、気分よく唱っていました。

その実施に大きく岳連にお世話になったリーダー講習会は二十数回になりました。より高きを求め続けた岳連からの若手の講師の話は生徒に大きな感銘を与えました。

登山部の顧問たちが自分たちの夢をかなえるべくインドヒマラヤへ四回遠征した時も、時に実行委員長として大きく支えてくれました。遠征が成功裡に終わったのも、常々人の和を大切にし、力量が上である岳連諸兄の言に耳を傾け、技術指導を受け、自らの力量を上げていくよう岳連との関係を強く主張されていた先生の考えが大きく働いています。

いつも家族を思い、若い世代を大切にし、登山やスキーに興じつづけ、自然の美しさと厳しさを求め続けた先生が、こんなに早く旅立たれるなんて夢想だにしていませんでした。

自らは表に出ず、常に岳連の一員として物を考え、今日の岳連と高体連の良好な関係を築き上げることに大きな力を発揮されました。少々せっかちだった先生は、あの世で私たちのくることを待っているかも知れませんが、どっこい、私たちにはシャバに未練もあり、やりたいことも数々あります。

山岳連盟や登山部がさらに質的に向上するよう努めます。あの世から見守っていて下さい。

冬山講習会に参加して

―2000年3月5日　冬山技術講習会―

太田山岳会　久保田　一美

二週間続けて冬山レスキュー講習会に参加した。八方尾根での日山協主催のものと、谷川岳での岳連主催のものである。どちらも講師は日山協遭難対策委員会常任副委員長の渡辺輝男氏であった。

雪崩の原因となる弱層の様々な角度からの説明に、雪の中の不思議さと複雑さを知り、私は目を見張った。弱層には目で見て分かるものもあれば分からないのもある。まず指先で軽くつついて雪断面の密度を確認した後メチレンブルーで染色し、更にバーナーで焼く。そうすると段々はっきりした層が見えてくる。又、スコップに三十センチ四方の雪を適当な高さの立方体にして乗せ、スコップの下から軽くトントン叩いてみる。視認では分からなかった層がずれていく。不思議な気持だ。カナダでは雪断面の温度を十センチ毎に測り層の変化を知る。温度は地表の零度に近づいていくように思われるが、実際にはバラバラであった。スクラムジャンプテストやハンドテストでの弱層確認もした。

それから弱層を知るには、その時々の気象情報のチェックも重要である。昨日降り積もった雪の後で放射冷却があり、夜間の湿度が高く風も弱ければ、今日積もった雪との間には当然弱層のあることが想像できる。登山者が気をつけるべき五つの雪質の一つ表面霜である。「冬山に入るには沢山の様々な情報を入手した方がいい」、「雪は雲から降ってくる時に、すでにそれぞれ状態が違っていて、降り積もってから更に変化する」、「何回も冬山に入り弱層テストを繰り返している人には、今回の層がいつもと違うということが分かる。しかしたまにやる人には分からない。リスクを承知で登る登らないはその人自身の問題である」という講師の説明は、私にとってとても新鮮な驚きであった。それは私の少ない断片的な知識の隙間を埋める説明であり、今迄の知識が一連の繋がったものになったように思った。

長距離を流れた雪崩は、焼結して粘土に変化するという恐ろしい性質を持っているという。決して会いたくない代物である。でも会ってしまった時はどうするのか。人間の生存率は十五分で九二％（八％死亡は外傷）、三十五分で三〇％、百三十分で三％というデータがあり、十五分なら殆ど助けられるそうだ。『山岳ぐんま』六十五号で阿部さんの雪崩ビーコンの記事が掲載されていたが、雪崩に遭った時に必要なのは、やはりビーコンとゾンデと使い勝手のいいスコップである。そしてそれらを使いこなせる人間だ。使いこなすには、何回も訓練して習熟する必要がある。二回の講習会で、雪崩発生からビーコン捜索、ゾンデ確認、掘り出し、梱包、搬送の順に通してレスキュー訓練をした。通してやることによって、次に自分は何をすればいいのか、自分の役割が見えてくる。

それから私は、今回の講習で、特に負傷者が低体温症による意識障害をおこしている場合に、的確な処置ができる知識と技術の必要性をひしひしと感じさせられた。何故なら遭難者にみたてたダミーを掘り出したものの、私も含めて救出に携わった私達の班全員がダミーに蘇生術を施すことができなかったのだ。私は愕然とした。もっともっと勉強しなければいけないと思った。そして一緒に行動する仲間が同じ知識や技術を持つことが必要なのだと思った。「善意でやったことで、かえって死なせてしまうことのないように、しっかりした知識を身につけてほしい」と言われた渡辺講師の言葉の重みをずっしりと感じた二回の講習会であった。

▲ビーコン

▼搬　送

味の店　ドライバーレストラン

一本松さかい

利根郡白沢村（国道120号線）　TEL.0278-53-2053

くらしに緑を　家庭に花を　各種鉢物生産・販売・宅配

小野園芸

利根郡白沢村平出1005

TEL 0278-53-2749　温室　TEL・FAX 0278-53-3987

味のりんご

アンナプルナりんご園

沼田市上久屋町1231　TEL・FAX　0278-23-6802

Annapurna

墓石・灯篭専門店

石桟 高橋石桟

高崎市石原町1497 TEL（027）323－8867
工場・高崎市八幡町1245-67 TEL（027）343－0270

群馬むすびの会会員

電話、弱電工事

プモリ電設

〒379-2223
佐波郡東村東小保方252
☎ 0270-62-2012

（有）山とスキーの店 石井

DreamBOX
伊勢崎市宮子町1819-1
TEL 0270-21-8025
FAX 0270-21-8026

本店（山の談話室 楼蘭）
伊勢崎市中央町18-8
TEL 0270-25-0272

T. H. I. CORPORATION

TEL:03(5245)0511
FAX:03(5245)0510
(株) テイ・エッチ・アイ

登山隊遠征

●ガモフバッグ、パルスオキシメーターのレンタル、販売
●隊荷輸送
●隊荷梱包用資材

個人手配からフルパッケージ・ツアーまで海外旅行に関するすべてをお手伝いします

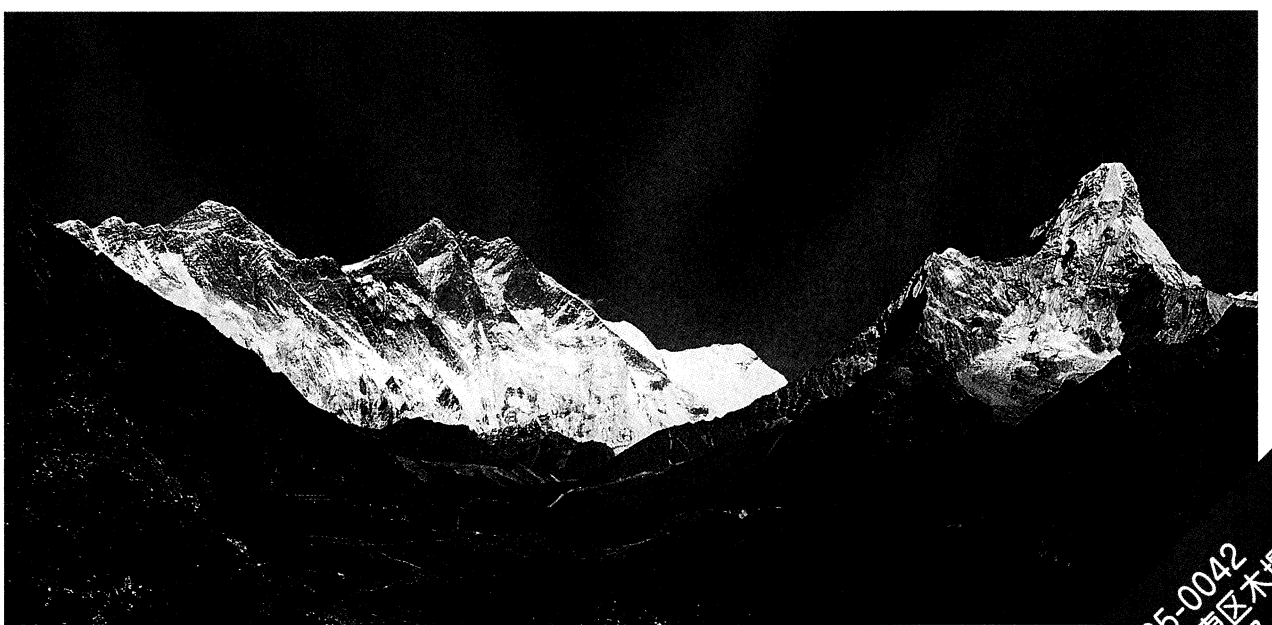
トレッキング

●ネパール、インド、ヨーロッパ・アルプスを始め世界各地でのトレッキング、海外登山

ディスカウント航空券

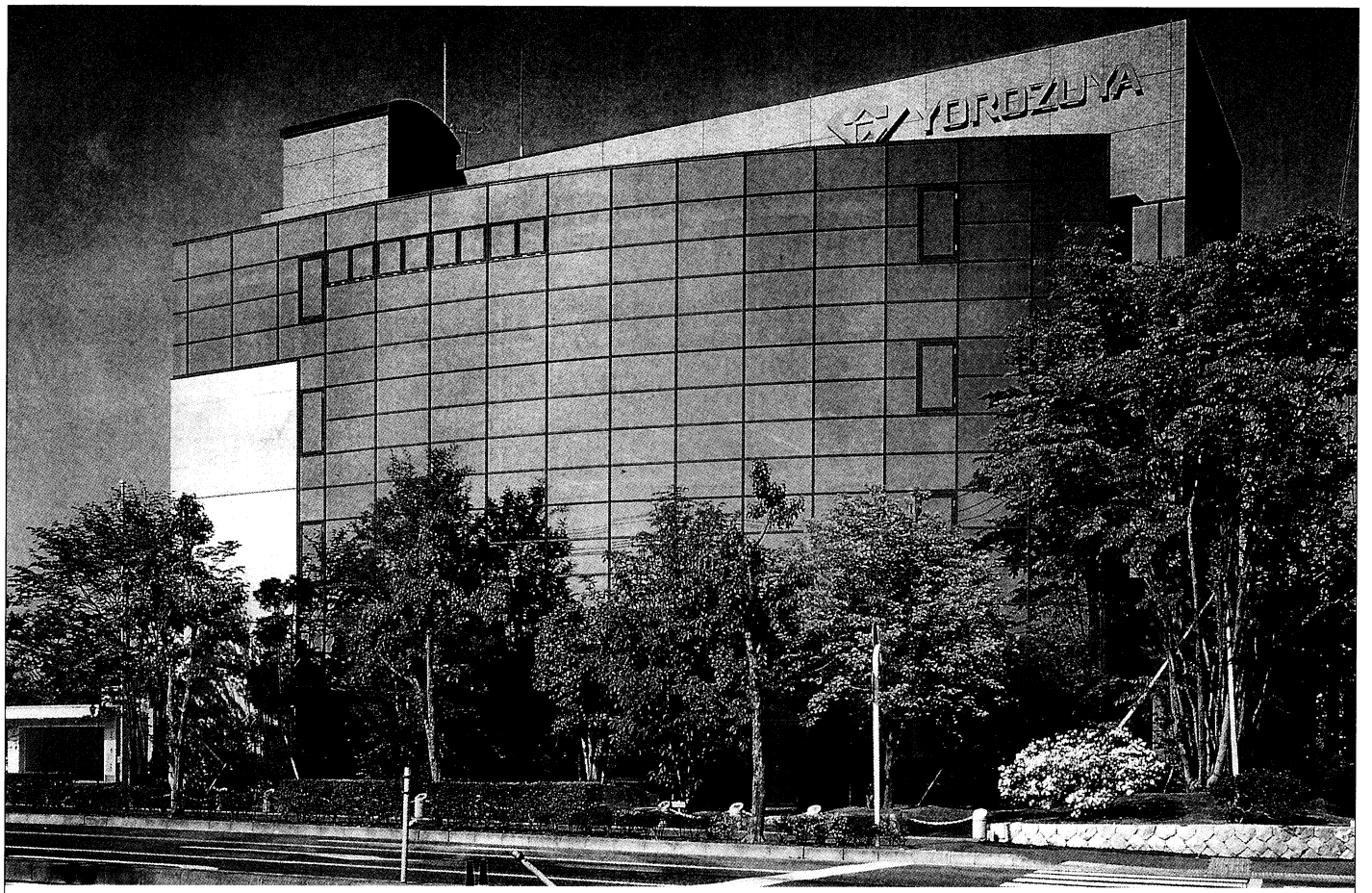
●世界各地への航空券
●ホテル、交通機関の手配
●ビザ取得代行

何でもお気軽にご相談ください



〒135-0042
東京都江東区木場
2-5-7
KHビル7F

T. H. I. CORPORATION



萬屋建設グループ

歴史、信用、技術をもって、21世紀の人間と環境を考える。

総合建設業

萬屋建設株式会社

会長　星野　光

■本社　群馬県沼田市上原町1756-2　TEL 0278-23-4648(代)　FAX 0278-24-3371
■支店　東京都豊島区東池袋4-2-7　TEL 03-3985-7631　FAX 03-3982-5964

群馬県公安委員会指定（公認）

株式会社　沼田自動車教習所

群馬県沼田市横塚町1088-13　TEL 0278-24-4811　FAX 0278-23-7960

昭和シェル石油特約店

有限会社　丸萬石油

群馬県沼田市上原町1756
TEL 0278-23-0018　0120-41-0018

日本工業規格表示許可工場

建設生コン株式会社

本　社　沼田市上久屋2338-1　TEL 0278-24-3111
大楊工場　利根郡利根村大字大楊187　TEL 0278-56-3682

総合建設業

株式会社　鈴木工業所

群馬県沼田市上久屋1162-5
TEL 0278-22-2846　FAX 0278-23-6233

マンション

萬栄ビル株式会社

東京都豊島区東池袋4-2-7
TEL 03-3971-3433　FAX 03-3982-5964